



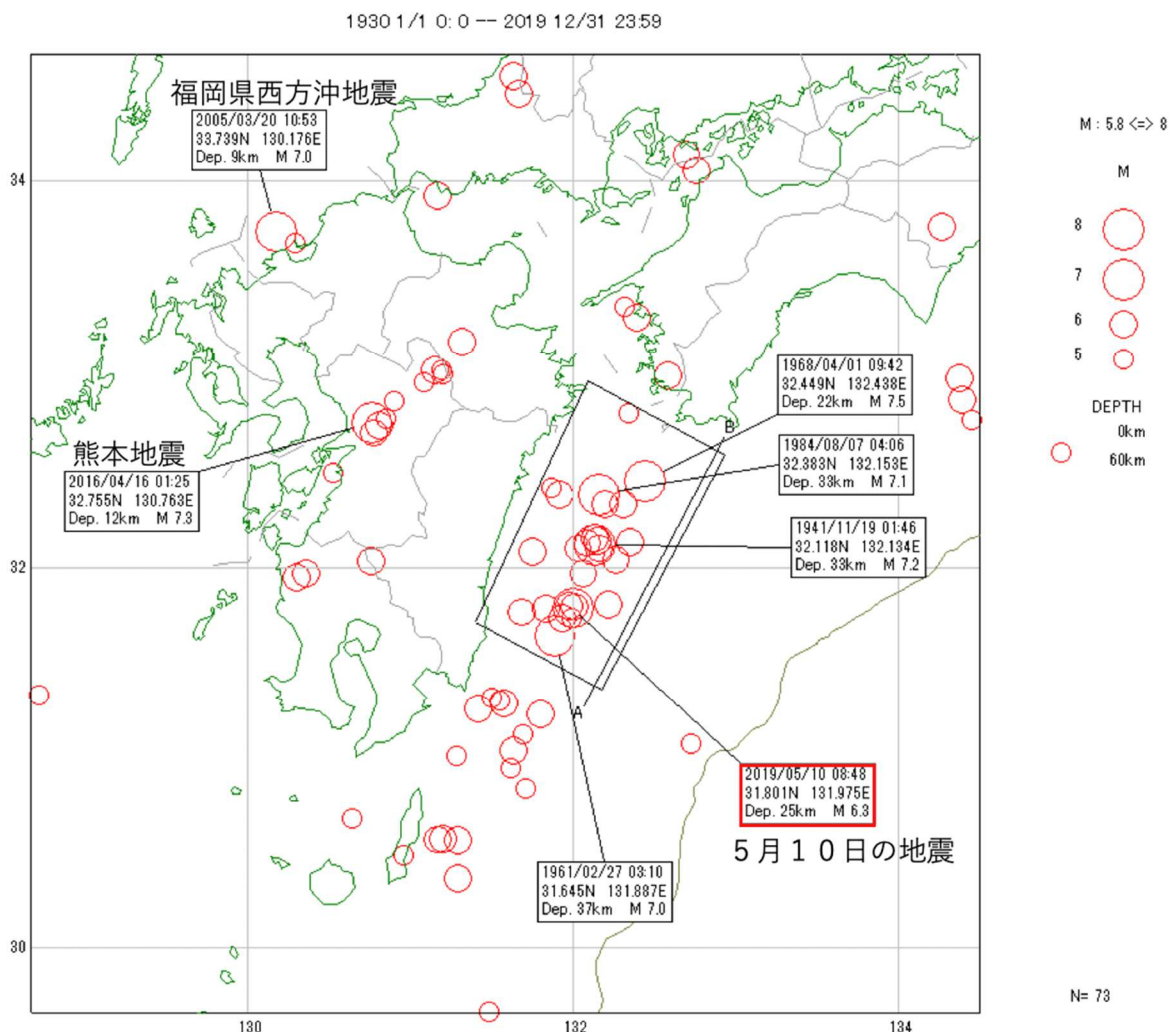
## 5月10日に発生した日向灘の地震

5月10日朝、宮崎県で震度5弱を観測する地震が発生しました。震源地は日向灘で、マグニチュードは6.3と推定されています。

この地震が話題となったのは、震度5弱を観測したというより、東日本大震災の後に見直された南海トラフの巨大地震の想定震源域内で発生した比較的規模が大きな地震だったためです。

2017年秋から、想定東海地震の前兆現象（前兆すべりというプレート間がゆっくり滑る現象）が観測された時に発令される警戒宣言の代わりに、『臨時情報』と呼ばれるものが発表される事になりました。今回の地震では、結果として臨時情報の発表基準には達していないという事でしたが、今後このような状況が繰り返される事になるのだと思います。

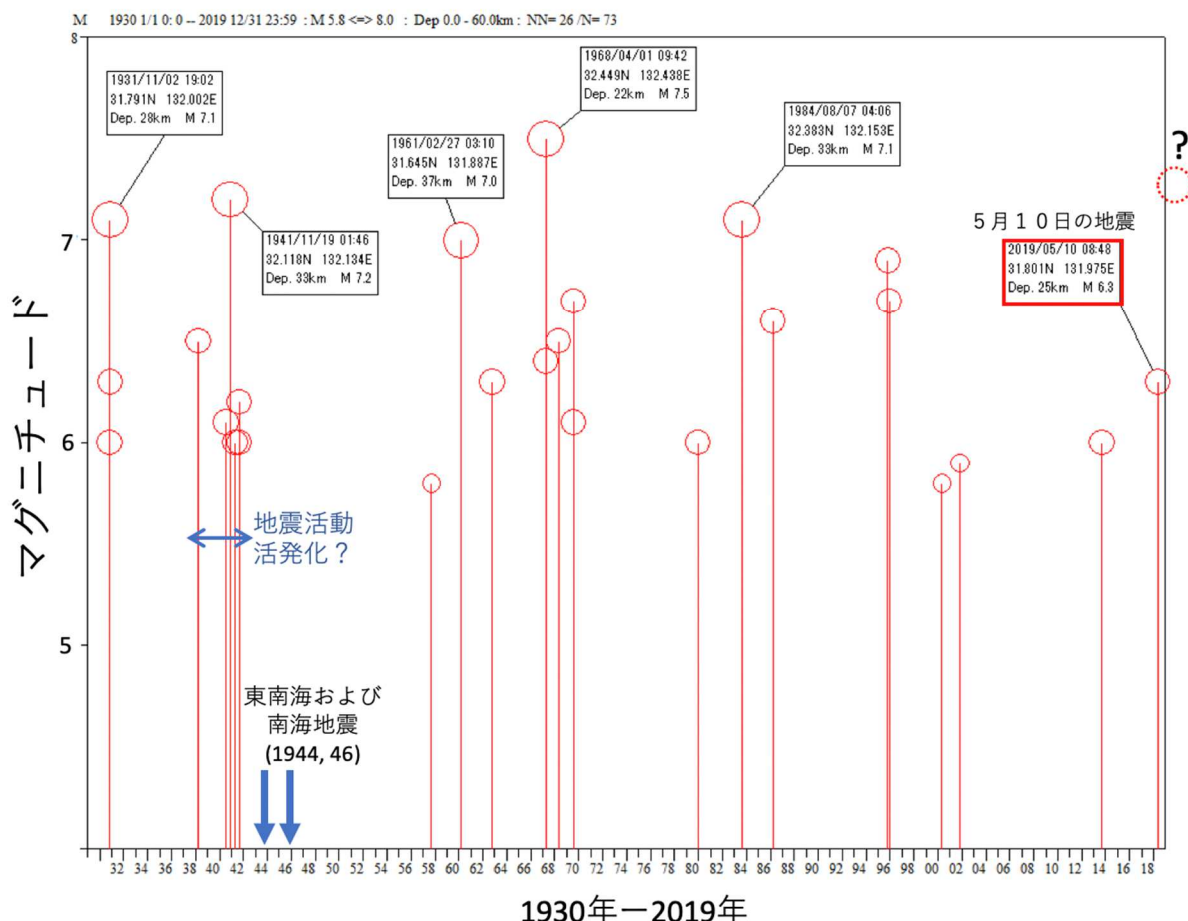
日向灘では、20-30年に一度ぐらいの割合でマグニチュード7クラスの地震が発生してきました。次の図は1930年以降のマグニチュード5.8以上の地震を図示したものです。およそ90年の間に73個の地震が発生しています。また実は四国沖では通常はほとんど地震が発生していないのも南海トラフの大きな特徴です。





次に前ページの図の中の四角の枠内で発生した地震がどのような時間間隔で発生していたのかを確認してみます。そうしますと、マグニチュード7クラスの地震が20-30年に一度ぐらいの頻度で発生している事がわかります。今回の地震はそれよりも一回り小さな地震であり、図中で?をつけて示したようなマグニチュード7クラスの地震の発生が過去の活動の推移から予想されます。

この図から、1944, 46年の東南海・南海地震の前の1941年から42年にかけて日向灘で地震活動の高まりがあった事もわかります。今後日向灘での地震活動活発化の監視が重要となります。



## 中部・近畿・中国・四国地方の地下天気図®

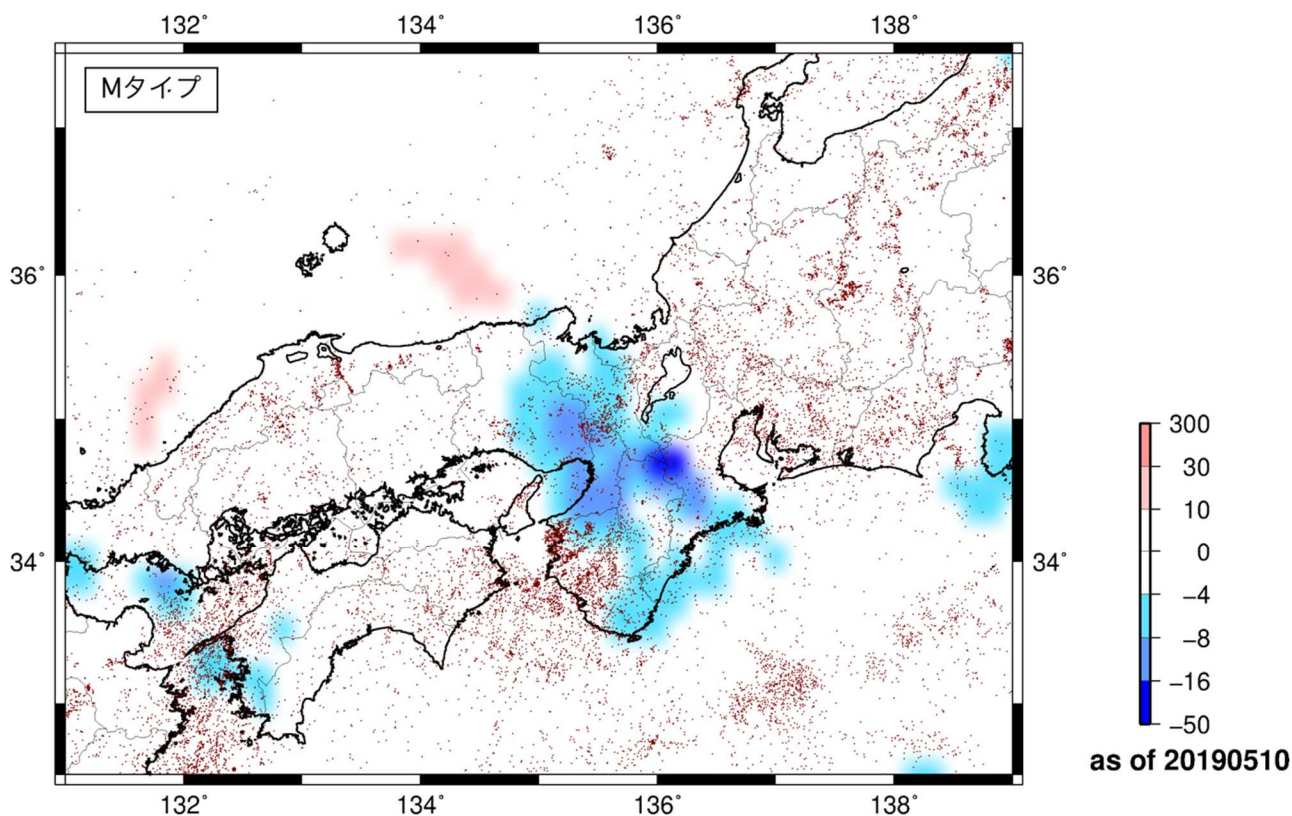
4月1日のニュースレターに引き続き、中部地方以西の地下天気図解析です。4月1日の段階で、近畿地方の地震活動静穏化が再び紀伊半島で静穏化が進行しだした事をお伝えしましたが、前回からは状況はそれほど変化していない事がわかりました。

ただ、Lタイプではこのような大きな静穏化は観測されていない事と、今回の静穏化は、静穏化の“形が悪い”ようにも思われます。これは昨年6月の大阪北部地震前の静穏化の異常は、異常の広がり比較的円形(楕円形)に近かったのですが、今回の異常では、そこまできれいな分布ではありません。これはあくまで過去の経験によるもので、理論的に証明されている議論ではありません。

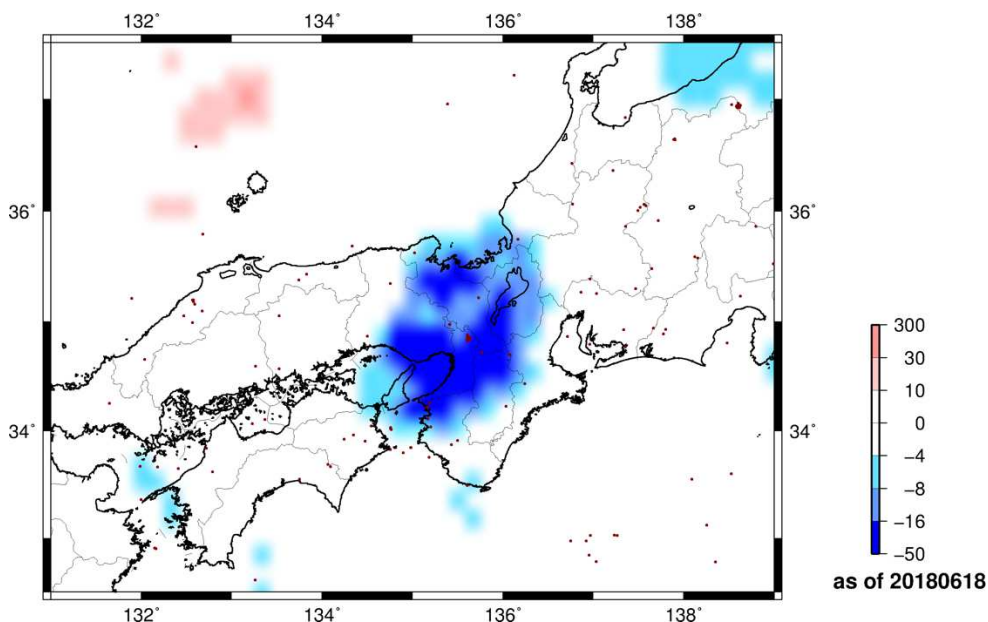
次にお示しする地下天気図は、5月10日時点のMタイプ地下天気図です。広がり円形(楕円形)とは少し違う事がおわかり頂けるかと存じます。つまり、今回の静穏化の異常は、大阪北部地震前の異常



と比べて、精度が低い可能性があると考えています。



参考のため、昨年6月18日時点（大阪北部地震発生直前）の地下天気図をお示しします。



大阪北部地震発生前の静穏化のほうが、空間的になめらかな形状の異常の広がりであった事がわかり頂けるかと存じます。